会員寄稿　随想

しんどそうな方を

育友会父母幹事　宍戸　真

英語を仕事で使っている。メール、社内会議、電話を使った会議などなど、ほぼ毎日である。ちなみに今の職場は専大の黒門まで徒歩1分に建つ真っ黒いビルだ。

いまから31年前に大学を卒業し、統一される前のドイツ（西の方の）系の会社に新卒として就職した。以降、何回か転職をしたが行く会社は全部外資系。アメリカ、英国、スウェーデン、多国籍企業などさまざま。最初のうちは上司が日本人だったが、転職するたびに少しずつ立場が上がり、上司の国籍もアメリカ人や中国人、シンガポール人、オーストラリア人となり、気が付けば同僚も多国籍。あるＩＴ企業にいたときは都内のオフィスなのに従業員の国籍数が27か国という職場に身を置いていたこともあった。そして上司のほとんどは日本にいなかったりする。普段の会話は電話などの通信手段に頼るしかない。最近はSkypeなど便利なツールを使って、顔を見ながら会話はもちろん書類を共有したりプレゼンも可能だ。

さて、ここまでで読者の皆さんは私がもともと英語が大変堪能ではないかと思われているであろう。そういえば妻は帰国子女だ。今年から専大でお世話になっている娘の名前も海外で活躍してほしい願いから洋風っぽくした（犬の名前はムクだけど）。私自身は世田谷区にある日本のフツーの大学の法律学科を卒業し海外留学の経験は皆無。仕事での海外駐在の機会もなく、居住する東京の府中市から50年以上、海外はおろか国内で転居したこともない。

こんな私がいやしくも英語を仕事で使うことができるのはなぜか？

英語が必要だということに気が付いたきっかけを偶然与えられたから。

30歳で初めて転職したアメリカの自動車会社は、採用面接は日本人による日本語の面接だったため、労せず入社できた。入社して驚いたのは、日本人社員ほぼ全員が英語をフツーに話す人たちであり、社内の1割強は日本語が話せない人たち。会議に1人でも外国人がいれば当然英語で話さなければならない。“聞いてないよ”と思ってもすでに遅い。当時の私の英語力では太刀打ちできず、自分の限界を感じてこの会社を辞めることにした。私の英語へのコンプレックスの始まりである。

⬆2013年7月、マスターカード在籍時、シンガポールでの会議にて

あれから20年以上、苦労しながらなんとか英語を使って仕事ができるようになったけれど、あの悔しい思いをもっと若いころにできていたら、今頃はもっともっと流暢に英語を使うことができていたかもしれない。予期せずしてその職場で“生きていくため”英語が必要な環境、当時の私なら躊躇して選ばなかっただろう職場に身を置けたことで、30歳で大切なことに気が付くことができたのは幸せだったかもしれない。

学生の皆さんは30歳までにまだ10年ほどはある。私は偶然チャンスが訪れたが、皆さんは何かを選択する時に迷ったら、あえて“しんどそうな方”を選ぶことをお勧めする。そうすれば若いときに受けたショックを前進する力に変えていけると思うから。それが語学でも専門分野でも仕事の世界でも。早いに越したことはない。

そして今日も私のしんどそうな人生は続く（笑）。